



## 『野菜師』

東郷まどか 著

株式会社 anemosu 刊

定価 4,290円 (本体 3,900円+税)

本書は、高知市の潮江地区で伝統野菜の生産と認知拡大に全身全霊を傾けるカリスマ農家・熊澤秀治の姿を追ったドキュメンタリー作品だ。

代々続く農家に生まれた熊澤は、市場最高値の薬物野菜を出荷するエリート生産者として名を馳せる。そして、世界的植物学者の牧野富太郎が残した土佐の在来作物約50種の種を託され、それらを栽培して“牧野野菜”とブランディングし、農家仲間や料理人らとともに伝統野菜の復活に取り組むのだ。

喧嘩っ早く、めっぼう明るく、行動の後から理屈がついてくるような熊澤の突破力と走り続ける活力に圧倒され、仲間との信頼関係に胸を打たれる。市場のせり人、百貨店のバイヤー、美食家のマダム、出版社の敏腕編集長、地元の小学生といった多様な人々との邂逅によって熊澤の理想は現実となり、羽ばたいていく。そんな地域の価値に言及する清明な物語だ。

人物たちを丁寧に掘り下げる筆致が見事で、伝統野菜の復活を目の当たりにする彼らの高揚感を読みながら追体験できる。幻の野菜である潮江菜の再現に成功した熊澤は、その野菜をこよなく愛する同郷の作家、宮尾登美子に食べてもらいたいと切望するが、熊澤の潮江菜が到着するのを心待ちにしていた宮尾はそれを食べる前に他界してしまうという哀切と優しさを極めたエピソードが心に染み入る。熊澤独自の栽培技術も詳説してあり、現役若手農家のための指南書としても有効だ。

本書は、多彩なプレーヤーが生産を担うことが日本農業の価値であると示唆する。たしかに画一化は地域の特色を奪い、それが地元経済にも影響を及ぼす。しかし、実際のところグローバル化による食の画一化と地域固有の食材・食文化の喪失が日本全国で進行中だ。そんな状況で多彩なプレーヤーなど望み得るだろうか。熊澤は一人しかいないのに。答えは本書の中で見つけてほしい。

(日本農業新聞 齋藤 花)